

海　　の　　紫（3・6・15）

高木　　豊（昭22・理）

二十二年理科卒業の高木です。実は、ピンチヒッターを仰せ付かりまして、あまりヒットしうにない古代染色の話をする気を起こしました。それで、関連しそうな書物の類を一生懸命調べてみたんです。不思議なことに、調べても全然、役に立たないものが大部分でした。今日「海の紫」という題を付けましたのは、実は、この頃ばかりに流行している貝紫関係の話を中心にしたと思いますからです。

それでもまず、色の話になるわけですが、色のない色の話、だいぶ紙にも書きましたけれど、これは、どうもピンとこないんですよ。色つてのは皆、人によって全部受取り方が違うんです。色というものは、例えば「赤」と言ってもどんな赤を連想されるか、第一連想、それが、皆、全部違うんです。確かに、どれも赤という範囲にはいるのですがね。それで、もうちょっと範囲を詰めた言葉で「韓紅」という色があります。ところが韓紅ってどんな色だと聞きますと、みんな違

うんです。つまり、紅色の濃色を指す人もあるし、それから、もみのきれの赤を指す人もあるんです。とにかく色つてのは、それを表す言葉があるにはありますが、その言葉がまともなコミュニケーションの機能を持っていません。

紫って言葉の範囲はもう一桁広くて、これは範囲がめちゃくちゃなんです。とにかく、ちよつと青っぽい赤から、それから赤っぽい青、どうかしたら茶色まで全部紫の範囲に入ってるんです。今日はそういう話をしたいと思うんですけど、実際には、色見本をお見せしないと全然話になりませんので、テープおこしをされる方気の毒ですけど、色を見ていただくということになります。ここで問題にするのは絵具の色ではなく、染色された裂の色相です。(カラー写真参照)

とにかく色というものは言葉では表現しにくいものだけということを、序の序としてしゃべっておきます。

それからここで、染色の話になるわけですけど、染めるといふ場合ですと、染められるものによつてずいぶん色が変わってきます。同じ染料を使って同じ方法で染めても、ウールを染めるか絹を染めるか、或いは、皮を染めるか—これらは一応、蛋白質繊維ですから、天然染料で染まりやすいんですが—全部色が違います。それから、もう一つ、染まり上がりでも、その染められた材料の光沢や、何というんですか、質感でというんですか、それによつてまた随分感じが変わってきます。ですから、物事が非常にやっかいになつてきまして、一番初めに東方の色と西方の色

という大きな、何というんですか、P Rを書いておきましたが、実際には東の方では、原則として染められるものが絹、西の方は、原則として染められるものはウール、ヘヤーの場合もありますけど、要するに毛です。そうしますと、そこでは染め方の違いと、或いは染料の違い、天然染料の違いというのは、これはまあ、しょうがないんですけどね。いろんな意味での染色の好みの違いもあるらしいんです。

東の方の代表として中国を挙げますと、すぐに出てくるのが五色です。例の青竜、朱雀、白虎、玄武、中央が黄竜ですか、とにかくそこで五つ色が揃うわけです。で、いわゆる五色というものはこれで成立するのです。ちょっとその五色というものの標準色、ここにカラー写真を入れておきました(A)、この中央は刈安で染めた黄色。(中国ではコブナグサ、八丈刈安でしょうが、同じような黄色です)それから、赤ですが、中国でも茜で染めます。それに青、藍染です。中国には古代から本草経というものがあります。薬草を集録したものですけど、その応用として染色に言及した部分もあります。それには白と黒の染色は書いてないんです。

この三原色どうやって染めたかという点、これは皆、植物染料で染めてあります。白は染めてないのです。どれも単一染料で染めてありますが、中国の本草書に出てくる染料は茜、それから藍、それから黄色は藍草(コブナグサ)と書いてありますかね。これはそれに対応する日本の染料で染めたものです。

赤染は茜で、日本のあかねと中国のあかねとだいたい似てるんです。節々からハート型の葉っぱが四枚ずつ出ている生のは根は橙いろ、乾くと赤くなります。(正倉院文書には赤根と書いたものもあります) その根が染料になるわけです。この黄いろは日本の刈安、いわゆる近江刈安で染めたものです。これはススキみたいな草です。ま、ススキとほとんど変わらないですけど、穂が違います。古代中国の黄いろは本草經の蘆草(じんそう)です。これはコブナグサと呼ばれ、八丈刈安という名前でも呼ばれていますが、とにかく、二宮金次郎の頃の田畑の雑草です。今は非常に少なくなりました。黄八丈の染料として今でも八丈島で使われています。育ちがよくて葉っぱが大きくなると、ちょうど露草の葉っぱを小さくしたみたいに、幅広くなります。

青は藍です。中国にはいろいろの藍があるらしいんですが、日本ではタデアイだけが栽培されています。これは生の葉で染まらないこともないのですが、普通は藍玉にして藍建てして使うわけです。ここにありますが青は、蓼藍の生の葉っぱで染めたんです。

これはあとから出てくるんですが、ついでですから紫草の話もしておきましょう。多年草で、花は小さくて白いです。ざらざらした草ですね、草として見れば、あまり上等の草じゃないんですが、その根っこが紫いろで染料になります。あ、そうそう、刈安は葉っぱが一番染料分も多いですね。後で話題になる紅花ですけど、これは花卉が染料になります。

話しをもとへ戻して、古代中国で、この五色という言葉がどこで出てくるかと言いますと、調

べてたらひどいところに出てきました。これは、このお話をするために調べたんですけど、周礼シュユライという古ぼけた本があります。周礼、儀礼、礼記ですか、その三つが三礼と呼ばれるそうですが、その周礼の中に、染人、染める人ですね、そういう役があります。それに「夏に玄、纁を染め、秋に夏を染む」と書いてあるんです。それが後漢の鄭玄の注では「五色を染めるのを夏と言う」と注釈がしてあります。それから、もう一つ周礼の冬官考工記には五色について本文の中にありますが、東方これを青といい、南方これを赤といい、西方を白といい、北方を黒と言う。天を玄といい、地を黄というと、そういう文句が有ります。とにかく五色というものの考え方は周礼の頃には出て来ている訳です。

詩経国風にも黄、緑など色んな色が出て来んですが、案外出てこないのが、実はこっちが探していた紫なんですけど。詩経国風には紫は出て来ません。また、五色の話では兵法で有名な孫子の中に、五色をませたらどんな色でも出来るんだとそういう文章があります。とにかく今の三色版の原理はすでに孫子先生の頃には知られていた訳です。

ところがこれがヨーロッパに行きますと、こういう風な五色という感覚の話はちよつとも出てこないのです。ヨーロッパの方ではもっぱら染物の話になりますと、それが上等の色として扱われたせいかどうか知りませんが、出て来るのは紫とそれから赤なんです。つまり、パールとスカレットなんです。例のプリニウスの博物誌の中で、貝紫について書いている所を読みます

と、貝紫染であたかもパープルと、スカーレットと両方とも出来るみたいな書き方がしてあります。

ここで貝紫の話に入るつもりなんですが、そこで一寸問題がありますのは、プリニウスの博物誌のラテン語を英語に翻訳した、翻訳者の独白があります。とにかくパープルとは一体何をさしているかよく分からない。茶色からバイオレットも入ればスカーレット、赤に近い色まではあるんだと。パープルの表現として一番はでない方は、固まった血の色です。血液が固まった色、そういうのがパープルだと。ですからよく分からないのですけど皇帝が怒った時に着る緋の衣も或は貝紫の衣裳かもしれないということです。

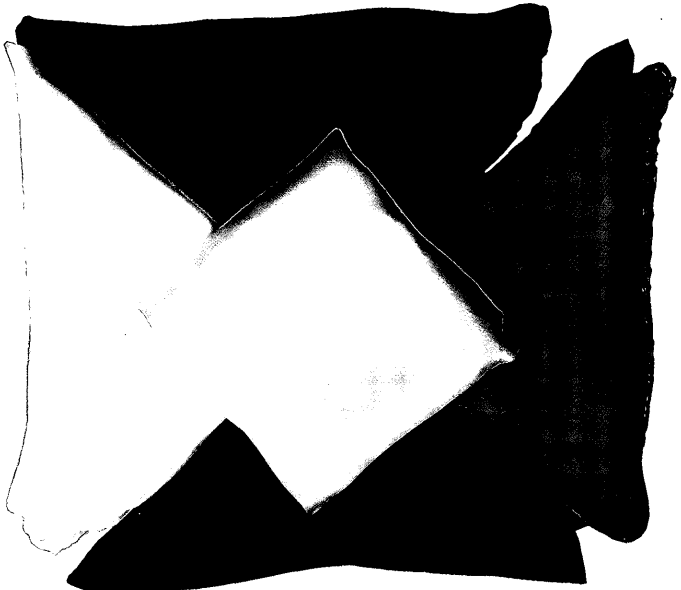
もっともあの地帯には染料としてケルメスと呼ばれる貝殻虫の一種があります。それで染める赤が有名です。私が今調べていたプリニウスの話を現代の化学者が解説したのがあるんですが、それでは、スカーレットはケルメス染色だろうと、それでほうり出してあります。ともかく、ここでは貝紫という言葉を使いますけれど、パープルは我々の紫草染ではないという事です。

テイリアン・パープル、ローマ紫、帝王紫、貝紫どれも同じような海産巻貝を材料とする紫染ですが、ここに入れた写真⑩を見て下さい。左は絹を貝紫で染めたもの、羊毛だともっと赤ミになります。左上の貝、大きいのはペルー産、中くらいのはメキシコ、小さいのは日本のイボニシです。どれも貝紫染に使うことができます。日本の紫草で染めた色は写真Bの右方の色です。右

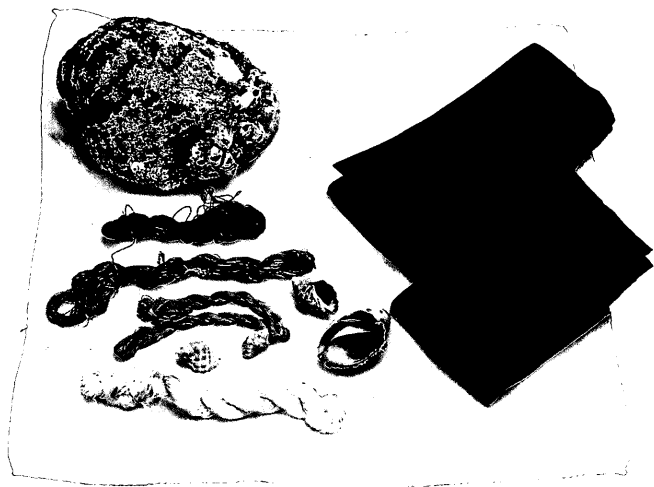
はバイオレット系で、左がパープルです。

ところでローマの時代にもバイオレットパープルがあり、青色パープルというのがありました。とにかく、西方での紫という言葉、パープルという言葉は色んな所で出て来ます。ギリシャ神話にも、これは原語が何んと書いたのかわかりませんが、いっばい出て来ます。例のトロイ戦争のへんでも紫はよく出て来ますし、どれも王族の衣裳、上等の服飾として出て来るようです。

このパープルは一体どうして染めるかというのがプリニウスに記載してあります。ただその前にどのくらい古くからあるのかという話で、クレタ島の近くの小島で紀元前一四〇〇年位のところで貝紫を採取したと思われる多数の貝殻が見つかっておりまして、その頃には貝紫染めが始まっていたのではないかと考えられています。それ以来ずっと使われていてギリシャの神々の衣裳としてはパープルという表現がよく使われています。バイブルの中にも青とパープルとスカールットの三色がよく出てくるんだそうですね。最後のスカールットはケルメスの染だと考えている人が多いのですが（バイブルではチルスでしたね）、貝紫かと疑う人もいます。あの町に関係する場合に出てくるのが多くて、後程、テイリアンパープルという言葉で表わされるチルスの町で染められた紫というのはバイブルの時代でももう定評があったらしいのです。この貝紫はエジプトの非常に古い時代ラムセス二世、紀元前一三〇〇年ぐらいの記録ですか、それに紫染のものの交易、その時代は舟でしたけれど、それについて述べている所があるのだそうですね。この辺のお



A



B



C

話は全部受け売りです。

ギリシヤ時代はまだパープル染を着ていたのですが絵画など全体に青い紫のチュニックを着ていますが、ローマ時代になりますと、そこに黄いろの地にパープルの縞が入っていると、そういうものになってくるらしいのです。士官だとそれが段々太くなり、指揮官は紫のクロークー外套を着ていて、危くなるとそれを旗の先に立てて、全員集合のしるしにしたという伝説があるそうです。ローマ時代ですと凱旋將軍がパープルの外套を貰う。絹糸で縫い取りをしたパープルの外套もあつたらしいですね。ま、そういう話がいっぱい書いてありましたけれども、これは私は伝説として取扱う訳です。プリニウスには、とにかくチルスの町で染められるパープルは特別な染め方をしたんだと書いてあるんですがね。とにかく *double dyed* と英語では訳してありますけれども二度染めですか。

パープルで染める染め方として一番簡単なのは特別な巻貝の仲間の色素腺を集めてきて、その汁で染め、それをそのまま強い太陽光にさらせば紫色に染まる、そういう素朴な染め方があります。(新大陸の古い貝紫染は多分この方法です。)

ところがこのプリニウスが書いていることによるとチリアンパープルの染め方というのは大規模な工場生産で材料が100ポンドであるとか、そういった大きな量での染色なんです。これは腐らせて染める発酵染めの一つです。紫染に利用できる貝は色々あります(残念ながら写真⑩の中に

は地中海地方の貝はありません。プリニウスにも紫染めの貝が何種類も書いてあります。

日本の貝でアカニシなども貝紫染に使うことができます。写真Bの左上の子供みたいなのは私が貝紫染色に使うイボニシという貝で、だいぶ古くなりましたので白くなりましたが、この貝の色素腺でも染まります。アワビみたいな馬鹿でかいのはペルーの貝です。ペルーのパラカス期ですから紀元前二〇〇年ぐらいですかね、その遺物の紫は貝紫で染めています。多分この貝です。これは現在ペルーのリマの市場で食用貝として売っているのを食べた後の殻を送って貰ったんですがね。それから中くらいのはメキシコの貝だったと思います。

貝の肉ではなく色素腺、貝の口の所にある小さな腺を使うんです。瀬戸内でとれるアカニシをいじられた方のご承知だと思っただけでも殻を割って日光にあてておくと紫色になります。これも口の近くに色素腺があります。とにかく、口の近くにある黄緑色のまるで腫物の膿みみたいな色素腺を取り、それを擦りつけて光をあてるときれいな紫色になります。しかしその途中で必ずものすごい匂いがします。ごく、ごく薄いと磯の匂いなんです。濃いとメチルメルカプタンそのものの臭いなんです。ものすごい悪臭です。それで実際にはそういう風な直接法が一般に使われたんでしょうけれど、プリニウスが書いてる分は、そういう腺の部分を集めて塩漬けにして三日おいて、そしてそれを鉛の鍋に入れてとろ火で、うんと弱い火なんですが、炉があつて、遠火で温めてるんでしょうが、それで10日間程、煮立てるといっつか温めてやる。するとだんだん

腐ってきて、うまく染まる様になると、場合によって水と小便ですかー人間の小便ですーそれを入れて腐らせる、場合によっては小便に蜂蜜をまぜて腐らせると。でこの小便を使うのは随分後までいろいろな場合に使われた様ですが、腐つたのをアンモニア水として使ってるわけです。とにかく、そういうやり方で染めるんだと。それから貝が違くと色も違くと。それにしても、この工場の周辺はとんでもない悪臭だったものと思われます。公害の規模の大きさは相当なものだったと考えられます。

最近のフランスの天然染色の本では貝紫について、これは赤っぽい色が染まる、これは青っぽい色が染まるという様なことがそれぞれの貝について書いてあります。私にはよく分らないのですが、とにかく、プリニウスには二種類の貝を使って二度染めすると綺麗な色が染まる。それがチリアンパープル、チルスの町の専売特許だったらしいのです。

ところがチルスの町はピザンチンの陥落と同時にサラセン軍に潰され、第一十字軍かなんかで取り戻されるんですが、その後またサラセン軍にとられて完全にその紫染めは消えてしまします。これが12世紀ですか。遡ってローマの全盛時代には宮廷の貴族の物だということで、それ以外の人間が着ることは禁止されていたこともあるようです。とにかく貝紫はプリニウスの時代にチルスだけでなしに色々な所で染められていたようです。スパルタでありますとか、カルタゴでありますとか、それから一番ひどいのはマルセイユですか、とにかくゴートの国、それからアフ

リカの西海岸ですか、そういった所でもパープル染めがあるんだと書いてあります。

ただ、チルスのパープル染が一番上等だという事でもつばら、もつばらですよ、本場物としてのチルスのパープルが王座を占めていた訳です。それでこの値段がまたものすごい事になりました。金持ちの貴族連中が争って買うもんですから、うんと値段が高くなりました。染物自身の量の数字が私の拾った本では抜けてるんですが、とにかくにせもので染めた値段は400デナリというのに対して、まともなもので染めた、チルスの染め方で染めたものは絹ならば15万デナリ、ウールの場合で5万デナリ、つまりにせ物の100倍の値段、逆に言えばにせ物は100分の1で買えたと言った方が確かなんですがね。

イミテーションのパープルとしては何種類か方法があります。一つは色目を変えたパープルを染めるためにケルメスの赤で染めて、その上にパープルをかけると、そういうものも出来た様です。完全なイミテーションとしては赤と青を混ぜれば紫ができるという考えのもとに、ケルメスとそれから藍、そういう重ね染のものができる。それからもう一つ、同じようなやり方。これは、今、よくそこらにあります、五、六世紀以後のコプト裂の紫、コプト紫というのがそうなんです。これは藍と、それから茜で染めている。それで、合わせて紫色です。この紫色のイミテーションの作り方というのね、実はこれも古いんです。

エジプトの墓から見付かったパピルスに書かれているんで、紀元前後には、もう十分、偽貝紫

の染色法が存在したわけです。その時に既にして、ケルメスとそれから（インジゴ）エンゲロ、それで茜と（インジゴ）エンゲロ、その二つの処方 が別々に出てくるんです。紀元二世紀になり、まずけど、バルコホパという、ユダヤ族の最後の反乱と呼ばれる事件があります。それよりは、むしろ皆様は、レターケープの発見という言葉で覚えてられると思いますが、死海の西っかわで、とにかく古文書とかなんとかのいっぱい詰まった洞窟が見つかった。その時に一緒に、紫色の羊毛がでてきています。これを調べた人の結論は、貝紫ではなくて明らかに偽物であると。まあ、その時代、ユダヤ教の祭司、ラビーですね。そのラビーの資格のある人は、とにかく偽物の貝紫のパープルを着るなどもつてのほかだ。そういうおふれが出ています。そしてその次に、信用のある商人から買いなさいと、素人ではともわかりませんと。そういう助言があつたんだそうです。しかし、そこにあるものは、明らかに偽物の紫だ、という結論が出ています。貝紫は、地中海だけでなしに、さっき言いましたように、インカにも存在していますし、南アメリカ、中央アメリカにも広がっています。

さて、それではこれが東洋にもあつたかということになりますと、ちょっとわかりません。これは、初めに言いましたように、海産の、巻貝の産物です。この貝は、海でなくては育ちません。つまり、貝紫は海の近所でないといふ染色できないのです。そういう意味で古代中国の文化は内陸、原則的に海から遠い文化です。さて、どうでしょう。中国の話に移ります。さっき、中国では、

五色という考え方にバカに熱心なんだと云いました。で、紫を探し初めたら、予想以上に少ないんですね。とにかくなかった方を先に挙げますと、詩経国風、それから礼記は見えてないんですが、易経にもありません。書経禹貢には一か所ありそうなんですけど、実はそこには紫は出てないんです。とにかくそれを参考にしたらしい。荀子王制篇にか青州だと思えますが、魚塩紫綵という言葉が出ています。紫とそれからその下の綵は、目の粗い麻織り物ですか、紫と綵とが一緒になるのか別なのか、どうもよく判りません。とにかくそこには紫があつたんかしらということですから、それであると、五経の方の論語に孔子様が一つだけ紫について言ってるんです。陽貨篇に「子曰、惡紫之奪朱也」紫の朱を奪うをにくむと訓むことになっていますが、間色である紫が正色である朱（赤）の地位にあるのは嫌だ、という意味らしいのです。中国では、さっき言ったように、五色という考え方が古いので五色の色が正色つまり本来の色なんです。その間にある二つの混じった色、間色というのは下の色、だから詩経には、緑衣黄裳、緑の上着に黄いろい袴と、そういう詩がありますけど、本来、黄色の方が上位で緑の方が下位なのに、それをさかさまにというのはおかしいと、そういう解釈がされています。紫も間色の一つです。

ところが紫は詩経国風では出てこないんです。ある私の知ってる人が、もう亡くなりましたけど、「紫の流行は隋以降、仏教とか道教の影響だ」と。それでね、おかしなものを調べたんですよ。老子道德経を読んでみたんです。ところが、紫は、出てこないんです。出て来るのは玄、

所屬不明の色です。仏教、それからね、お経の方は、うちは念仏宗ですから浄土三部經、これがまた、不思議と出てこないんです。觀無量壽經に「か所だけ赤、白、黄色ですか、そういった蓮の花を挙げた最後に一つだけ紫が出てくるんですよ。あそこが一番最後にね、青と紫が蓮華の色としてちょっとだけ出てくる。そのくらい私は紫というのは坊主くさい色だと思ってたんですけど、どうもお経にもそれほど出てこないんです。『紫磨黄金』というのはまあ別でしょう。

論語陽貨篇の成立した時代、それでことによったらその辺が大体紀元前後ですか、中国で紫の流行があったのでしょうか。その頃、紫がはやったっていうお話が一つだけ、楽しいお話があります。これは長つたらしいんですが、皆様ご存知の「韓非子」の中にある寓話です。

齊の桓公紫を着るを好む。一国ごとく紫を着る。この時に当り五素、一紫を得ず（五束の白糸を売つても一束の紫色の糸が買えなかつた）。桓公これを憂う、管仲に言いて曰く、寡人紫を着るを好む、紫はなほだ貴し、紫の貴きこと甚しく、一国の百姓紫を着るを好んでやまず、寡人、いかんせん。管仲曰く、君、これをとどめんと欲するや、なんぞ紫を着るなからんことを試みざるや。左右にいいて曰く、我はなほだ紫の臭いを惡む、ここに於いて左右たまたま紫を着て進む者あり、公必ずいう。少しくしりぞけ、我、紫の臭を憎む。公曰く、よし。この日より郎中紫を着る者なし、その明日國中紫を着る者なし、三日境内紫を着る者なし。

ともかくこういふおとぎ話があるのです。ただ一寸気になる事は紫の臭いを憎む、臭いがする

という事です。まあ普通の紫草で染めた紫でも少し臭いがする、獣くさい臭いがするのですが、貝紫で染めれば新しければプンプン悪臭をはなつ訳です。もう一つ、これが齊の国の話であるという事、つまり海の傍の国であるということ、それから憶測すると、ことによたら中国にも貝の紫があった、もしそうならこれしかないということになります。後代の紫は全部紫草（紫根）で染めた紫です。

日本はといいますと文字が導入され、仏教が入って来た時には紫草による紫染も一緒につれて来ているんです。ところがこの紫はいつごろ、中国ではやり出すのでしょうか、とにかく司馬遷の史記にも、紫は殆ど出てこないのですが、その天官書にはこれがあります。これは太一（天帝）の北極星と、これをとりまく星座、小熊座、大熊座のへんですが、これを紫宮（後には紫微垣）と呼んでいます。

天帝の座とその周りに紫の垣が設定されているというのです。これは中国のもっとも古い民間信仰の固まりみたいなものと、それからその時代に発達して来た神仙説、仏教、道教、そういうものが習合して紫色を持ち上げたものらしいのです。時代的に考えると、あるいは西方の紫色崇拜が東西交流の一つとして流入したのかも知れません。日本に入ってきた時にはその通りで、聖徳太子の紫は中国に倣って第一位ですし、養老令も紫、それから緋・緑・青・黄・ですが、そういう色の順位になっています。日本では紫は初めから上等の色として入って来ているのです。

ところできつきあげてました周礼天官に、掌染草、染草を司さざると、そういう官があります。それが染草を集めてそして染人が時期を定めていろいろの色に染めるといふのがあり、とにかく中国の染色の歴史は紫と関係なしに古いのです。きつき言っていました茜と、茜はもって絳を染むべし。緋いろですネ、藍はもって青を染むべし、藍草はもって黄を染むべし。神農本草經にそういう風に書いてあります。同時代に日本に導入された紅花は中国にとつても外来のもの、唐の時代の本草に始めて載ります。より古い神農本草には載っていません。以て絳を染むるにたふですか、「可し」とは書いてありません。つまり紅色は正色の赤ではないんです。

それはさておき、当時の日本に話を戻しますと、第一位の色として紫があるんです。それ以前の日本で貝紫があつたかということになりますと、いろいろ問題があります。きつきも出てきましたアカニシですが、モースでしたか、大森貝塚、東京の、あの大森貝塚、あそこを掘り返した人ですがね、あそこでアカニシの貝殻を見つけて弥生時代の日本でもきつきと貝紫があつたんだという説を出したんです。アカニシという貝は、食用貝としてそれほど珍らしい貝でもないのですね。貝紫の染めに使われたというのが本当かうそか分からない。まあ、こないだも「吉野ケ里」の話で赤にし貝があつたということです。貝殻の欠けたところがちようど色素腺をとるのに便利なところだ、きつきと貝紫を染めたんだろうというせりふがありました。自分で見ただけでないと信用しないたちなんで、よくわかりません。とにかく、古代日本の貝紫染については、まだ憶

測の域を出ていません。

日本の紫草は、中国で古くから使われていた紫草に対応しております。その色素は中国の紫草とほとんど変わらないはずで、現在、よく使われている軟紫根というものには、実は、あれは昔からの紫草ではなくて、西域地方、新疆、青海、名は新疆仮染草でしたか、とにかく西の方の産物で植物の属も違います。まあ色素は紫草と同じですけどね。そういうことです。日本のいろいろの染草のお話をする余裕がありそうですね。

まず、紅花なんです、実はこれは花びらが染料になります。花びらが、この咲きたては黄色いんですがね、しばらくたつと、だいたい色になります。だいたい色の花びらを摘んで、そして普通は摘みあげて水をかけて、むしろをかけ、そして一日か二日、ちょっと白かびがはえかけたところで集めて水洗いし、そして搾って固めるわけです。ところが、この紅花、日本の紅花は、とげがたつて摘むのが大変だと書いてあるんです。現在、花屋でベニバナといって売っているのはそれほど刺がありません。日本の紅花と同じ種なんです、品種が違いました、この頃はやりの紅花油を搾るために栽培される紅花で、これは刺がなくて大きな実のなるところに特徴があります。もつとも、紅花は本来イランかイラクか、あの辺の高原が原産地で、あれから東と西へ別れていったらしいです。東へ来た方は染め物に使われるのが主な用途で（もつとも実から油も取ったんですけどね）、西へ行った方は、もつぱら油を取ることになってしまいました。

ディオスレコリデスという人がまとめたギリシアの本草書があります。お医者さんの薬の本ですが、その中にも油薬の材料として紅花油が挙げてあります。ですから、向こうへ行ったら、ひまわりの種で油を搾るのと同じように油原料植物として取り扱われていたらしいのです。もっとも向こうさんの名前でも、アフリカンサフロンだとかね、バスタードサフロンだとかありますからね、サフランと同じように黄色の染料としても考えたのかもしれないですね。

実際には赤い色素の方は、あまり使われていなかったようです。紅花には赤い色素と黄色い色素と二つありまして、今でも黄色い色素の方は食用色素としてオレンジジュースの色つけに使っているはずですが、この方は絹とか毛を黄色く染めることができます。つまり、サフランと同じような用途をもっています。ただ、日本や中国では黄色い色素を抜いちゃって、そして紅色、くれないの色を染めた訳です。も少し余裕があるので天然染料で染めたら、どんな色が染まるのかという話をおきます。

付表をご参照願いますが、染料には、媒染を必要としない染料（0、無媒染）、媒染によって発色、染着する（1、2、3）などがあります。媒染剤の違いによって染色色相の変化するものも少なくありません。

ふつうに使われる赤系統の染料としては、茜が代表的で灰汁やアルミニウム塩の媒染で黄みの赤、緋いろが染まります。これを標準色として五色の赤にあてました。(A)黄は、刈安草のアルミ

媒染です(A)。青は蓼藍の生葉染、この方法では濃色は暗くなりやすいのが難点です④。青を染める染料としては藍が独占的ですが、ヨーロッパでは大青(クワイセー)(中国名は菘藍、おなじような植物です)。インドではインド藍、中国では菘藍、蓼藍(クワイアイ)、琉球藍などですが、色素成分はどれもインジゴで、染色法も似通っています。

黄いろは、刈安、盡草のほかに、黄檗(キハク)があります。絹を直接に染めることができると便利な染料です。ほかに古い染料として梔子(クチナシ)があります。これも、絹を直接に染めることができる染料で、西方のサフランも同じ色素をもっています。色が褪めやすいのが難です。

間色である緑は、適当な黄いろとアイの重ね染によって得ることができます。日本ではカリヤスカキハダが使われます。写真Cのさみどりはカリヤスと生葉藍。この紅(くれない)◎は紅花の染です。濃淡二色、この濃色を韓紅と呼ぶ人も少なくありません。紅花の染は、紅花を水に浸し可溶性の黄色素を流出させた後、アルカリ性の水で抽出すると、橙黄色の液が得られます。この中に染めるべきものを入れ、酸を加えて中和すれば液は紅色になり、同時にきれも染まります。ことに、綿や麻は絹より簡単に染まります。よく紅(べに)いろと云いますが、紅(べに)は本来化粧品として、唇や頬にさすのが紅粉(べいふ)で色名としては、くれない、紅色(べにいろ)というのは江戸時代になってからのことだと思われ
ます。

梔子(クチナシ)の黄の上(うすく)に、うすく紅がかかると明るい橙いろ、この間の皇太子御袍の黄丹に似た色にな

ります。延喜式の梔子染は、梔子だけで染めたものは「黄梔子」、紅花を加えたものが「梔子」とされていて、黄丹に紛らわしいものは着用を禁ずる旨のお触れが出ています。

黄いろを黄檗で染めて紅をかけると明るい橙赤色になります。その上に紅花を染め重ねると緋色に近い色になります。袷の裏地に使われた紅絹ベニヌはそういう染色の筈です。とにかく褪めやすい色です。昔の緋威の鎧の今も真赤なのは茜染、茶いろに変色しているのは黄いろはともかく紅花の染による紅緋と考えてほば間違いないものと思います。

古代から輸入されていて、その後、引続いて輸入された染料に蘇方スオウがあります。染料分が多く、明礬媒染で赤、灰汁媒染で紫味赤、鉄媒染で紫になる染料です。標準的な染色色相は紫ミ赤で、江戸時代の芝居の血糊はこの染料を使つたといえます。非常によく使われた染料で、江戸時代の赤は、紅緋か、この蘇方の赤です。茜染は、この時代には、ほとんど見当りません。

ここで、また、話は紫に戻ります。わが国の紫は原則的に紫草による紫色です。ところで、この染色はアルミニウム塩とアルカリが必要なのですが、酸性、アルカリ性で色が変ります。酸性に偏れば赤ミ、アルカリ性に偏れば青ミの紫になります。写真⑧の右方にあるのが紫草染です。淡色のものが、貝紫（B左）との色の違いが感覚的によくわかるかと思えます。とにかく、灰汁として椿とかヒサカキとか、サワフタギとか、アルミニウム塩を多く含む木の灰を使うことになっていますが、その灰の使い方にも、いろいろ秘伝があつたようで、江戸紫、京紫などの差が生

れたようです。

紫は確かに上等の色で、日本人の好みでもあります。しかし紫草の生産量は限られています。そのせいも、ここでもいろいろの似せ紫が出現します。藍と紅の重ね染による二藍フタアイ（江戸時代になると紅ベニかけ花色でしたか、式亭三馬に出ています）蘇方の鉄媒染による偽紫、これは濃く染めると忍者向きの紫頭巾になります。蘇方と藍によるもの、蘇方と鉄と藍によるものなどがあらわれます。

江戸時代まで、あるいは明治初期まで、化学染料の普及以前の染色品は、すべて天然染料に依存しています。ごく少数の動物染料、貝紫、ケルメス、コチニール、ラックなど、墨、黄土、赤土などの無機質顔料を除けば、すべて植物で、世界各地、いずれも似た構造の色素をもつ植物が選択利用されています。こうした染料は産地が限定されているので、日本では、付表にまとめたようなものが、殆んど全部です。（黒や茶色のタンニン系染料は、植物の共有成分なので、ここには挙げません。）

ここに挙げた染料は、多くのものは鉄分に敏感で、染色用水の良否が染色効果を左右します。また、原材料が天然物ですから、繊維染料、副資材も同一ということが無く、染色色相は、同一条件のつもりの操作でも一定しないのが普通です。

昔の染織品で、今でも綺麗なものが残っているのは、染色、繊維の耐久性を考えれば、全く奇

蹟的としか云いようがありません。中には、やや色褪せて古色を帯びたものもありますが、それはそれなりに美しいものです。

海の紫、貝紫は、その中でも一番古いものの一つで、一番早く亡失された染色です。それでも現代までその色彩を保っている貴重な染色でしょう。

付表 日本の染料（太字は奈良時代に使われていたもの）

日本で使われていた主要な染料のリストを次に掲げます。まともな染料として古代から今に至るまで利用されてきたものは色素濃度が高く、乾燥に耐え流通可能なものに限られています。リストは次の順に記載されています。

植物名、染料名、植物形態、利用部位、栽培・自生品採集の別、科名、染色色相

〔0 無媒染 1 灰汁 2 アルミニウム塩 3 鉄塩 3'、3 後アルカリ処理 4 石灰水〕

アカネ、茜根、多年草、根、採集、アカネ科、0・橙 1・2・赤 3・紫

ムツバアカネ、西洋茜、多年草、根、アカネ科、2・赤 3・紫

ベニバナ、紅花、一年草、花弁、栽培、キク科、特殊染法・紅

ラックダイ、紫鉱、エンジ、カイガラムシの虫体、1・2・紫ミ赤

ケルメス、エンジ、カイガラムシの虫体、1・2・赤

コチニール(洋紅)、コチニール虫、虫体、1・2・赤、赤、紫
 スオウ、蘇方、高木、心材、輸入、マメ科、1・紫赤、2・赤、3・暗紫
 ロックウッド、高木、心材、輸入、マメ科、2・紫、3・黒
 ムラサキ、紫草、多年草、根、採集/栽培、(軟紫根、輸入)、ムラサキ科、1・2・紫
 貝紫、特別の巻貝、色素腺、?、0・赤、紫
 アイ、蓼藍(スクモ、藍玉)、一年草、葉、栽培、タテ科、生葉または建染、青、紺
 リユウキウアイ、多年草、葉、栽培、キツネノマゴ科、タイセイ、一年草、葉、栽培、
 ナタネ科、インドアイ、低木、葉茎、栽培、マメ科、ヤマアイ、山藍、多年草、葉、
 採集、トウダイグサ科、0・緑青、青、退色しやすい
 オオボウシバナ、青花、一年草、花卉、栽培、ツユクサ科、0・青(水溶性)
 クチナシ、支子(山梔子)、低木、果実、栽培/採集、アカネ科、0・黄
 サフラン、多年草、めしべ、栽培、アヤメ科
 キハダ、黄檗、高木、内樹皮、採集、ミカン科、0・黄
 オウレン、黄蓮、多年草、根茎、採集/栽培、キンポウゲ科、0・黄
 カリヤス、刈安草、多年草、葉茎、採集、イネ科、1・2・黄、3・灰緑
 コブナグサ、蠶草、八丈刈安、一年草、全草、採集/栽培、イネ科、1・2・黄
 エンジュ、槐花米、高木、花蕾、採集/栽培、マメ科、1・2・黄、3・灰緑

ハゼノキ、櫨、高木、心材、採集／栽培、ウルシ科、2・黄 3・黒 4・赤褐
ヤマモモ、楊梅皮（モモカワ、シブキエキス）、高木、樹皮、採集、ヤマモモ科、2・暗黄
ウコン、鱒金、多年草、根茎、輸入（東南アジア）、しょうが科、0・黄
ツルバミ、橡、クヌギなどの堅果、殻斗、採集、ブナ科、3・黒 3'茶
フシ、五倍子、小高木、ヌルデの虫えい、採集、ブナ科、3・黒 3'茶
シイ、椎、高木、樹皮、小枝、採集、ブナ科、3・黒 3'茶

（大阪教育大学名誉教授）